

# 郊外生活の一年

大久保にて

岡本綺堂

青空文庫



震災以来、諸方を流転して、おちつかない日を送ること一年九カ月で、月並の文句ではあるが光陰流水の感に堪えない。大久保へ流れ込んで来たのは去年の三月で、もう一年以上になる。東京市内に生まれて、東京市内に生活して、郊外というところは友人の家をたずねるか、あるいは春秋の天気の良い日に散歩にでも出かける所であると思っていた者が、測らずも郊外生活一年の経験を積むことを得たのは、これも震災の賜物といつていいかも知れない。勿論、その賜物に対してかなりの高価を支払ってはいるが……。

はじめてここへ移つて来たのは、三月の春寒がまだ去りやらない頃で、その月末の二十五、二十六、二十七の三日間は毎日つづいて寒い雨が降った。二十八日も朝から陰くもつて、ときどきに雪を飛ばした。わたしの家の裏庭から北に見渡される戸山が原には、春らしい青い色はちつとも見えなかった。尾州侯の山荘以来の遺物かと思われる古木が、なんの風情もなしに大きい枯枝を突き出しているのと、陸軍科学研究所の四角張った赤煉瓦の建築と、東洋製菓会社の工場に聳そびえている大煙突と、風の吹く日には原一面に白く巻きあがる砂煙と、これだけの道具を列ならべただけでも大抵は想像が付くであろう、実に荒涼索莫、わたしは遠い昔にさまよい歩いた満洲の冬を思い出して、今年ひの春の寒さが一としお身にし

みるように感じた。

「郊外はいやですね」と、市内に住み馴れている家内の女たちはいった。

「むむ。どうも思ったほどに好くないな」と、わたしも少しく顔をしかめた。

省線電車や貨物列車のひびきも愉快ではなかった。陸軍の射的場のひびきも随分騒がしかった。戸山が原で夜間演習のときは、小銃を乱射するにも驚かされた。湯屋の遠いことや、買物の不便なことや、一々かぞえ立てたら色々あるので、わたしもここまで引込んで来たのを悔むような気にもなったが、馴れたらどうにかなるだろうと思っっているうちに、郊外にも四月の春が来て、庭にある桜の太木二本が満開になった。枝は低い生垣を越えて往来へ高く突き出しているので、外から遠く見あげると、その花の下かげに小さく横たわっている私の家は絵のようにみえた。戸山が原にも春の草が萌え出して、その青々とした原の上に、市内ではこのごろ滅多に見られない大きい鳶とびが悠々と高く舞っていた。

「郊外も悪くないな」と、わたしはまた思い直した。

五月になると、大久保名物の躑躅つづじの色がこころ一円を俄にわかに明るくした。躑躅園は一軒も残っていないが、今もその名所のなごりを留めて、少しでも庭のあるところに躑躅の花を見ないことはない。元来の地味がこの花に適しているのであろうが、大きい木にも小さい

株にも皆めざましい花を着けていた。わたしの庭にも紅白は勿論、むらさきや樺色の変り種も乱れて咲き出した。わたしは急に眼がさめたような心持になって、自分の庭のうちを散歩するばかりでなく、暇さえあれば近所をうろついて、そこらの家々の垣根のあいだを覗き<sup>のぞ</sup>あるいた。

庭の広いのと空地の多いのを利用して、わたしも近所の人真似<sup>ひとまね</sup>に花壇や畑を作った。花壇には和洋の草花の種を滅茶苦茶にまいた。畑には唐蜀黍<sup>とうもろこし</sup>や夏大根の種をまき、茄子<sup>なす</sup>や瓜の苗を植えた。ゆうがおの種も播<sup>ま</sup>き、へちまの棚も作った。不精者のわたしに取っては、それらの世話がなかなかの面倒であったが、いやしくも郊外に住む以上、それが当然の仕事のようにも思われて、わたしは朝晩の泥いじりを厭<sup>いと</sup>わなかった。六月の梅雨のころになると、花壇や畑には茎や蔓<sup>つる</sup>がのび、葉や枝がひろがって、庭一面に濡れていた。

夏になって、わたしを少しく失望させたのは、蛙の一向に鳴かないことであつた。筋向うの家の土手下の溝で、二、三度その鳴き声を聴いたことがあつたが、そのほかには殆ど<sup>ほとんど</sup>聞こえなかつた。麴<sup>こうじまち</sup>町<sup>まち</sup>辺でも震災前には随分その声を聴いたものであるが、郊外のこちらでどうして鳴かないのかと、わたしは案外に思った。蛭も飛ばなかつた。よそから貰つた蛭を庭に放したが、その光は一と晩ぎりまで皆どこかへか消え失せてしまった。さみだ

れの夜に、しずかに蛙を聴き、ほたるを眺めようとしていた私の期待は裏切られた。その代りは犬は多い。飼犬と野良犬がしきりに吠えている。

幾月か住んでいるうちに、買物物の不便にも馴れた。電車や鉄砲の音にも驚かなくなつた。湯屋が遠いので、自宅で風呂を焚くことにした。風呂の話は別に書いたが、ゆうぐれの涼しい風にみだれる唐蜀黍の花や葉をながめながら、小さい風呂にゆっくりと浸つているのも、いわゆる郊外気分というのであろうと、暢氣のんきに悟るようにもなつた。しかもそう暢氣に構えてばかりもいられない時が来た。八月になると早ひでりつづきで、さなきだに水に乏しいこちら一帯の居住者は、水を憂いずにはいられなくなつた。どこの家でも井戸の底を覗くようになって、わたしの家主の親類の家などでは、駅を越えた遠方から私の井戸の水を貰いに来た。この井戸は水の質も良く、水の量も比較的に多いので、靨てきめん面に苦しむほどのことはなかつたが、一日のうちで二時間ないし乃至三時間は汲めないような日もあつた。庭のまき水を儉約する日もあつた。折角せつかくの風呂も休まなければならぬような日もあつた。わたしも一日に一度ずつは井戸をのぞきに行つた。夏ばかりでなく、冬でも少しく照りつづくと、ここらは水切れに脅かされるのであると、土地の人は話した。

蛙や蛭とおなじように、ここでは虫の声もあまり多く聞かれなかつた。全然鳴かないと

いうのではないが、思つたほどには鳴かなかつた。麴町にいたときには、秋の初めになるはたおりむしと機織虫などが無暗むやみに飛び込んで来たものであるが、ここではその鳴く声さえも聴いたことはなかつた。庭も広く、草も深いのに、秋の虫が多く聴かれないのは、わたしの心を寂しくさせた。虫が少いと共に、藪蚊も案外に少かつた。わたしの家で蚊やりを焚いたのは、前後二月に過ぎなかつたように記憶している。

秋になつては、コスモスと紫苑しおんがわたしの庭を賑にぎわした。夏の日ざかりに向日葵ひまわりが軒を越えるほど高く大きく咲いたのも愉快であつたが、紫苑が枝や葉をひろげて高く咲き誇つたのも私をよろこばせた。紫苑といえ、いかにも秋らしい弱々しい姿をのみ描かれていたが、それが十分に生長して、五株六株あるいは十株も叢をなしているときは、かの向日葵などと一様に、寧ろむし男性的の雄大な趣を示すものである。薄むらさきの小さい花が一つにかたまつて、青い大きい葉の蔭から雲のようにたなびき出いでているのを遠く眺めると、さながら松のあいだから桜を望むようにも感じられる。世間一般からはあまりに高く評価されない花ではあるが、ここへ来てから私はこの紫苑がひどく好きになつた。どこへ行つても、わたしは紫苑を栽うえたいと思つている。

唐蜀黍もよく熟したが、その当時わたしは胃腸を害していたので、それを焼く煙をただ

ながめているばかりであった。糸瓜へちまも大きいのが七、八本ぶら下って、そのなかには二尺を越えたのもあった。

郊外の冬はあわれである。山里は冬ぞ寂しさまさりけり——まさかにそれほどでもないが、庭のかれすすき芒が木がらしを恐れるようになる、再びかの荒涼索莫がくり返されて、宵々ごとに一種の霜そうき気が屋を圧して来る。朝々ごとに庭の霜柱が深くなる。晴れた日にも珍しい小鳥が囀さえずずって来ない。戸山が原は青い衣をはがれて、古木もその葉をふるい落すと、わずかに生き残った枯れ草が北風と砂煙に悼いたましく咽むせんで、かの科学研究所の煉瓦や製菓会社の煙突が再び眼立って来る。夜は火の廻りの柝きの音が絶えずきこえて、霜に吠える家々の犬の声けわが嶮けわしくなる。朝夕の寒気は市内よりも確たしかに強いので、感冒にかかり易いわたしは大いに用心しなければならなかった。

郊外に盗難の多いのはしばしば聞くことであるが、ここらも用心のよい方ではない。わたしの横町にも二、三回の被害があつて、その賊は密行の刑事巡査に捕えられたが、それから間もなく、わたしの家でも窃盗に見舞われた。夜が明けてから発見したのであるが、賊はなぜか一物をも奪い取らないで、新しいメリンスの覆面頭巾を残して立去った。一応それを届けて置くと、警察からは幾人の刑事巡査が来て、町ていねいに現場を調べて行ったが、



賊は不良青年の群で、その後の中野の町で捕われたように聞いた。わたしの家の女中のひとりが午後十時ごろに外から帰つて来る途中、横町の暗いところで例の痴漢に襲われかかつたが、折よく巡査が巡回して来たので救われた。とかくにこの種の痴漢が出没するから婦人の夜間外出は注意しろと、町内の組合からも謄写版の通知書をまわして来たことがある。わたしの住んでいる百人町には幸さいわいに火災さいわいはないが、淀橋辺には頻繁に火事沙汰がある。こうした事件は冬の初めが最も多い。

「郊外と市内と、どちらが好うございます。」

私はたびたび訊きかれることがある。それに対して、どちらも同じことですねと私は答えている。郊外生活と市内生活と、所詮は一長一短で、公平にいえば、どちらも住みにくいというのほかはない。その住みにくいのを忍ぶとすれば、郊外か市内か、おのおのその好むところに従えばよいのである。

(大正十四年四月)



# 青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「猫やなぎ」岡倉書房

1934（昭和9）年4月初版発行

初出：「読売新聞」

1925（大正14）年6月1日

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 郊外生活の一年

## 大久保にて

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>